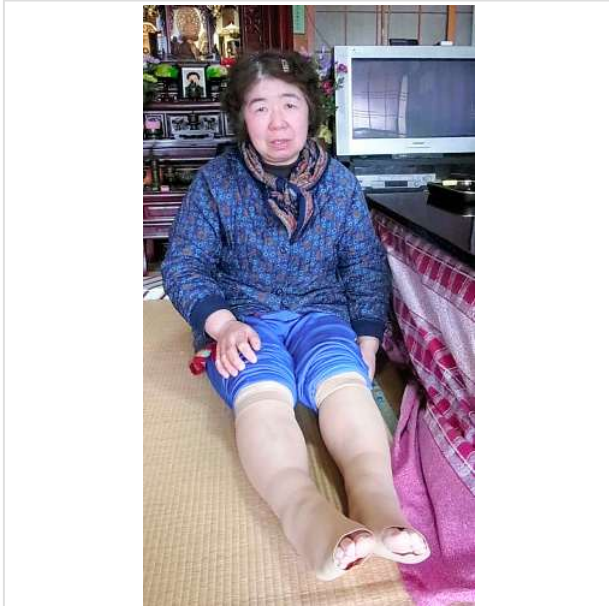


〈患者を生きる:1860〉手術後、立ち仕事も平気



手術後は、ひざ下の弾性ストッキングをつけて過ごしている＝福島県二本松市

■血管の病気 下肢静脈瘤:5

35年間も足のこぶに悩まされてきた福島県二本松市の野地扶美子さん(60)は、昨年末、怖くて避け続けてきた下肢静脈瘤(かしじょうみゃくりゅう)の手術を受ける決心をし、福島市の福島第一病院を訪れた。

心臓血管外科部長の小川智弘(おがわ・ともひろ)さん(46)が超音波で調べると、原因となっている太ももの表面を走る「表在静脈」の直径は15ミリと比較的太く、蛇行していた。

レーザー治療は、静脈が細い方が効果があると考えられているうえ、蛇行してい

るとレーザーを通す管が内壁を傷つける恐れがあった。「静脈を抜き取るストリッピング手術をしましょう」と提案した。

手術は今年2月に行われた。静脈麻酔で眠った状態にし、ももの付け根の静脈を切開、そこから金属のワイヤをひざの辺りまで通す。血管の端とワイヤを糸で結び、血管を裏返しながら静脈を引き抜く。その後、ふくらはぎのこぶを切除し、1時間半ほどで手術は終わった。

本来は日帰り手術だが、病院まで自分で車を運転してきていたため、大事をとり、1泊入院した。小川さんは足を締め付け、血管の膨らみを防ぐ「弾性ストッキング」も使うよう指示した。

ストッキングの締め付け具合が強く、ひざ下まで上げるのに最初のうちは両足で20分ぐらいかかった。傷口からの感染を予防するため風呂を我慢して4日ほど家で休み、手術から6日目に職場復帰することになった。小川さんからは「立ちっぱなしで何でもしていいですよ」と言われていたが、不安だった。

初日からヘルメットの組み立て工場朝8時から夜7時までの立ち仕事を再開した。ストッキングに締め付けられた足は違和感を感じたが、むくみをあまり感じないまま、夜まで過ごすことができたような気がした。

1カ月後の再診となった3月下旬。茶色かったふくらはぎの皮膚はいくぶん白くなり、ボコボコも消えてきていた。時間がたてば、更に良くなるという。

長い間、一人で悩みを抱える必要は全くなかった。もっと早く、医師に診てもらえばよかった――。10時間以上立ったままで仕事しても、疲れにくくなった今、つくづくそう思う。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright ©2012 The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.